

# pamuñcantu saddham 再考

—「信を發こせ」か「信を捨てよ」か—

村 上 真 完

仏が悟りを開かれた直後に、自分の悟った理法 (dhamma) が、深遠で人々には理解されない、と思って説法を躊躇したところに、梵天が現れて説法を請う。それに対して仏が答えたという詩の中に、この語句が出ている。すなわち、

apārutā tesam amatassa dvārā<sup>(1)</sup>  
ye sotavanto pamuñcantu saddham<sup>(2)</sup>  
vihimsa-saññī paguṇaṃ na 'bhāsim<sup>(3)</sup>  
dhammaṃ paṇitaṃ manujesu Brahme ti<sup>(4)</sup>

(*Vin.* I. p. 7<sup>4-7</sup>, *D.* II. p. 39<sup>21-24</sup>, *M.* I. p. 169<sup>24-27</sup>, *S.* I. p. 138<sup>22-25</sup>)

(1) [Brahme] を加える *M.*

(2) pamuccantu *S.*

(3) na bhāsim *S.*, *M.*; n'abhāsim *D.*, na bhāsi *Vin.*

(4) Brahme'ti *Vin.*

これを中村元教授は、こう訳している。

耳ある者どもに甘露 (不死) の門は開かれた。「おのが」 信仰を捨てよ。梵天よ。人々を害するであろうかと思って、わたくしはいみじくも絶妙なる真理を人々には説かなかったのだ。(波線は筆者)

(中村元選集 [決定版] 第11巻『ゴータマ・ブッダ』I 春秋社、1992年、p. 449) この中、波線部の訳文に問題がある。筆者は、少なくともそこを「信を<sup>お</sup>發こせ (寄せよ)」「自分が傷つく (煩わされる) ことを想って」と改めたい。

実はすでに筆者は、上のように解する私見を公表し詳論した (『仏教論叢』第32号、昭和63年9月、pp. 63-67、村上真完・及川真介『仏のことば註』(四)、春秋社、1989年10月、pp. 181-189)。

しかしその後、本年 (1992) になって、中村元教授は『ゴータマ・ブッダ』I (中村元選集 [決定版] 第11巻、春秋社、1992年2月) を公刊して、拙論の趣旨に反

論じ、また仏教思想研究会編『仏教思想11 信』(平楽寺書店、1992年5月)の第一章にも「「信」の基本的意義」という論文を載せて自説を展開している。そこで筆者は中村教授に答えることが、責務であろうと考える。

中村教授は問題の語句を、古くから「「おのが」信仰を捨てよ」(『ゴータマ・ブッダ (釈尊伝)』法蔵館、昭和33年、p. 120) と訳しており、また最近「かれらは (各自の) 信仰を捨て去れ」(『信』p. 25) と訳す。そして、

最近学界の一部ではその句は「信を寄せよ (發こせ)」という意味であるという主張がなされている。その論拠は、註釈文献 (パーリ語) と漢訳にそのように解釈されているからであるという。しかしこの解釈には賛成しかねる (『ゴータマ・ブッダ』I. [決定版] p. 462)

と、註記してその理由をのべている。要するに「信を發こせ」ではなくて「信仰を捨てよ」であるというのである。その理由は、まずサンスクリット文献では pramuñcati は、『リグ・ヴェーダ』以来「捨て去る」「放棄する」という意味であり、少し遅れた文献では「ゆるめる」「自由にする」ことを意味している。このことは、諸辞典の一致している語義である。次に「信を發こせ」という解釈は、要するに後代の解釈であるというのである。しかし後代の解釈であるブッダゴースの註釈文 (パーリ原文) を一行引用して、訳文を示すことなく、「当時の諸宗教に対する信仰を捨てよというのであろう」(同p. 461) と付記している。パーリ註釈文の真の意味を再確認すべきである。いま、その前に、動詞 pramuñcati (pra √muc, パーリ pamuñcati) の意味を確認したい。

中村博士はこの動詞の意味を上述のように示して、辞典 (O. Böhtlingk u. R. Roth, Monier Monier-Williams, V. S. Apte など) の名をあげて、それらの一致している語義である、という。しかし、それは実は正確ではないのである。

いま手始めに荻原雲来編『梵和大辞典』11, (鈴木学術財団、1967) の pramuc の項をみると、

解放する…… (中略) ……發する、放つ、…… (中略) ……贈与する、付与する、(涙 asrūṇi を) 流す

とある。詳しい用例はないので、これだけでは、この語の用法はよくわからないが、中村博士がいうほどこの語の意味や用法は単純ではないことが予想される。

ここで、まずペートリンクとロートの辞典 (Sanskrit Wörterbuch, St. Peters-

burg, 1955-75, *PW* と略) における  $\text{pra } \sqrt{\text{muc}}$  の用例をみてる。すると、ここには、中村教授がいうような単に「捨て去る」とか「放棄する」という意味が、私の解するところでは、ないのである。少なくとも第一義的な意味ではないようである。 $\text{pra } \sqrt{\text{muc}}$  の意味を *PW* の示す用例からまとめてみると、能動態の意味は、

- ① [弓の弦 (jyā)、掩い (abhinahana, 目隠し)、縛縄 (pāsa) を] 解く (はずす、ほどく)
- ② [罪 (pāpa)、老 (jarā)、恐れ (bhi)、悪運 (durita) を] 脱する (振り払う、追い払う、取り去る)
- ③ [精液 (retaḥ)、煙 (dhūma)、声、音 (svara) を] 出す、[涙 (āśru) を] こぼす
- ④ [矢 (astra)、槍を] 放つ
- ⑤ [行為 (karman) を] 離れる (控える)
- ⑥ [臥床 (āstarāṇa)、花環 (sraja)、女を] 見捨てる
- ⑦ [首飾り (mālā)、視力 (dr̥ṣṭi) を] 与える (授ける)
- ⑧ [人を、縛縄 (pāsa)、戦い (samara)、神々 (devatā) から; 馬 (āśva) を] 解放する (自由にする)

に分類されるであろう。⑥は「放棄する」といってもよい。⑥と⑦とでは日本語の意味では反対のようであるが、本当はそうでない。自分の方から手放し捨てる、ということ (⑥の意) は、相手に対しては与える、授ける (⑦の意)、ということになるのである。以上の八つの意味を、もっと簡単にしてみると、

(a) [しばっているものを] 解く

(b) [中 (傍、体内) にあるものを] 出す (放つ)

ということになろう。

パーリの *pamuñcati* の用例と用法は、*Pāli Tipiṭakam Concordance* (Vol. III. Part III. London 1969) に出ている。いまその用例をみると、大体は先の *PW* の用例の延長線上において理解できるものである。

しかしそれらの中で、「言葉 (vācā, girā) を発する (放つ、語る)」という新しい用例があることに注意したい。「言葉を捨て去る」のではないのである。それにならって、同様に「信 (saddhā) を発する」と解することは、理解しやすいであろう。先に見たように動詞  $\text{pra } \sqrt{\text{muc}}$  が、「中にあるものを出す」のが

原意の一つであった。してみると心の中にある信 (信仰心) を外に向かって出す (しかし、捨て去る、というのではない) というのは、不自然ではないはずである。このことを確定する前に、信 (śraddhā, saddhā) の用例を調べておきたい。

śraddhā, saddhā (信) の原語について考察するとき、我々は知らずしらずの中に、日本語の信や信仰の意味を投影して考えていないか、という点を反省しなければならない。日本語では、正信もあれば、邪信、迷信、盲信のような用語例もある。「信を捨てる」「信仰を捨て去る」ということは、日本語では全く問題のない表現である。しかしはたして、サンスクリットの śraddhā やパーリの saddhā に、邪信のような用例があるかどうか。そして特に śraddhā を「捨てる」とか、「捨て去る」とかいうことが意味をなすのかどうか。こういうところに、最も注意する必要がある。それを知るためには、śraddhā (saddhā) の用例を集めて考察しなければならない。

śraddhā の用例とその意味については、これまで相当の研究が行われてきた。その中で Hans-Werbin Köhler, *Śrad-dhā in der vedischen und altbuddhistischen Literatur*, Glasenapp-Stiftung Band 9, Wiesbaden 1973 (Dissertation, Göttingen 1948) は、主にヴェーダ<sup>1)</sup>文献における動詞 śrad-dhā と名詞 śraddhā の用法とその意味を考察している。また Paul Hacker, *śraddhā*, *WZKSÖ*. VII. 1963, pp. 151-189 もヴェーダ以来の śraddhā の意味用法を整理している。

ケーラーによると『リグ・ヴェーダ』(*R̥g-Veda, RV*) においては、śraddhā は「神学的な信」(theologisches Credo) ではなくて、「信頼」(Vertrauen)——それは神々やその力、しかも大抵は Indra に関する信頼——である (p. 64) という。そしてこれにはハッカーも賛成している (Hacker p. 160)。そしてその意味の発展は、信頼 (Vertrauen)、忠実さ (Treue, 誠実さ)、帰依 (Hingabe)、供儀愛好 (Opferfreudigkeit)、布施愛好 (Spendefreudigkeit) となる (Köhler p. 64, Hacker p. 160) と。ブラーフマナにおいては、śraddhā は供儀の力に対する信頼となる (Köhler p. 65) と。

また、ハッカーは śraddhā を知性的な śraddhā——それは師の教示に対する信頼、依存心である——と祭祀的な śraddhā——それは人の欲望を神へと運び、司祭者へと運ぶ乗物 (媒介者) である。——とに分けている (p. 188)。

いま詳しい検討は省略するが、ケーラー等が示した śraddhā の意味の「信頼」、「忠実さ」等は、「捨てる」という動詞の目的語となりえないであろう、ということだけは付言することができよう。実際に śraddhā を「捨てる」と解すべき用例は見出されていない。śraddhā は「(断ずる) (√chid, 断つ)」という動詞の目的語となる。これは「信頼を断ち切る」というのである。

さて上引の詩句の意味を確認するため、パーリ註釈をもう一度読解してみよう。

*Pamuñcantu saddhan ti sabbe attano saddham pamuñcantu, vis-*<sup>(1)</sup>  
*sajjentu* <sup>(2)</sup> *Pacchima-pāda-dvaye* <sup>(3)</sup> *ayam attho: Aham hi attano*  
*paguṇaṃ* *suppavattitam pi imam paṇitaṃ* *uttama-dhammaṃ*  
*kāya-vācā-kilamatha-saññi* <sup>(4)</sup> <sup>(5)</sup> *huvā na 'bhāsim* <sup>(6)</sup> *idāni pana sabbo*  
*jano saddhābhājanam upanetu: puressāmi nesam saṅkappan ti* <sup>(7)</sup>  
*(Sp. V.p.963<sup>18-22</sup>, Sv II.p.471<sup>10-16</sup>, Ps.II.p.181<sup>23-28</sup>, Spk.I.p.203<sup>8-11</sup>)*

(1) muñcantu Sv.

(2) vissajjantu Sp., Spk.

(3) ayam ev' attho Sp.

(4) huvā manujesu dvamanussesu Sp.

(5) nābhāsi Sp., nābhāsim Spk., n'abhāsim Sv., na bhāsim Ps.

(6) 以下を欠く Sp.

(7) saṅkappan'ti Sv.

『信を<sup>お</sup>発せ(寄せよ)』とは、皆、自分の信を<sup>はっ</sup>発せ(寄せよ)。最後の二句にはこの(以下の)意味がある。なぜなら、私は、自ら<sup>2)</sup>よく知っている>よく確立(理解)している[法である]けれども、このくすぐれた(微妙な)>最上の<法(教法、真理)>をば、[自分の]身・口の疲労を<想って>いて、[人々に即ち神々や人々 Sp] <説かなかったのだ>。

ところが、今やすべての人々は信の器を捧げ(向け)よ。[私は]彼ら(人々)の思いをかなえよう(満たそう)と。』

ここには「信仰を捨てよ」という解釈の余地はない。いまこれに従って先の詩節の拙訳を示すと、次のようになる。

『彼等に不死(甘露)の門が開かれた。およそ誰でも耳ある人達は信を<sup>お</sup>発

せよ(寄せよ)。[自ら]煩わしき(傷つくこと)を想って、[私は自ら]よく知っているくすぐれた(微妙な)法をば人々に説かなかったのだ、梵天よ、と。』

波線部が中村元訳と異なることになる。この詩節の漢訳の諸例や、サンスクリット文献における併行例については、すでに示した(『仏のことは註』(四)pp. 185-189)。また上の解釈のためには、*Suttanipāta* 1146とその註釈の解釈が参考になる。それについてもすでに述べた。上の詩節についての私の解釈を改める必要がないことが確認された<sup>3)</sup>と考える。ここに梵天の勧請に答えて、私は、聞く者たちが信を<sup>お</sup>発し、仏を信頼すべきことを願いつつ、説法を決心した、という趣旨に解されるのである。

#### <注>

1) 原実(Minoru Hara)教授の書評(*IIJ*, vol. 19, 1977, pp. 105-108)があり、有用である。また同教授の Note on two Sanskrit Religious Terms Bhakti and Śraddhā, [*IIJ*, vol. 7, 1964, pp. 124-145]は、古典文学の用例を多く網羅している。

2) 以下3行の解釈は『仏のことは註』(四)p. 184 L. 18 とは異なるが、今の訳が正しい。

3) なお Rev. Richard Morris は Notes and Queries, *JPTS* 1885, pp. 46-48において、pamuñcati saddham を正しく proclaim the faith, declare the faith と解している。しかし、その解釈は最近まで無視されてきた。K. R. Norman, *The Group of Discourses (Sutta-Nipāta)*, London 1984) が *Suttanipāta* 1146c の pamuñcassu saddham ([君も仏に] 信を寄せよ(発せ))を declare your faith と英訳したのは、Morris 説の継承であろうか。

また1992年6月20日愛知学院大学における日本印度学仏教学会において、阪本(後藤)純子氏は「梵天勧請」について研究発表をして、この詩節とサンスクリット諸本との文献学的な比較考察をしていたが、筆者と同様の理解を示して問題の文句を「信仰を寄せよ」と訳している(『梵天勧請』の原型『印仏研』41-1, 平成4年12月, pp. 474-469)。

ISSN 0287-1165

# 佛教論叢

第 3 7 号

平成 5 年 9 月

浄土宗教学院